

---

# 東方空狐道

しらたま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方空狐道

### 【Nコード】

N3229Y

### 【作者名】

しらたま

### 【あらすじ】

ぼっくり逝つて畜生道。肉球ぶにぶにの前足では何もできないので狐っ娘になってみました。なにそれこわい。

注：最強？ ハツ：（失笑）な方は回れ右をオススメします。注：当作品は東方二次創作作品でございますが、オリ要素を多分に含むと思われます。注：兎の如く怠ける鈍亀更新です。

## 導入なんてこんなもん（前書き）

ぬるいものが書いてみたくなったのでやってみました。何番煎じかもう全く分かりませんが、先達の皆様に乗便という形になるかもしれません。きっとのんびりいきます。

皆様の本命の小説の片手間程度によかったらどうぞ。

## 導入なんてこんなもん

「おい流、今日S高の連中んところにカチコミに行くんだけどよ、お前も行かねえ？」

髪をくすんだ金に染め学生服を着流している不良風の男子生徒が、帰る支度をしていた一人の男子生徒に話しかけた。

帰り支度をしているのは、留見とじみ流ながる。周りには変人と呼ばれているが不思議と嫌われない、ある意味浮いている人物だった。声も容姿も中性的で、学生服を着ていなければ初見で彼を男と断定できるものは少ない。

「んー？ …今日は気が乗らないからやめとくわー」

「おっ前相変わらずだなあ。お前、前もあその連中ぼこったんじやなかったか？」

「人聞き悪いな。知りあいがかつあげされてたから、懇切丁寧に説得して帰ってもらっただけなんだが…」

なよなよした容姿ながら、流は非常に腕が立つた。小さい時から彼が貪欲に力を求めた結果である。何故それほど強くなるうとするのかを彼に問えば、彼はいつもここう返した。『何事も、自分の思い通りになった方がいいだろ？』。

力至上主義者。その答えを聞いたものはみなそう考える。

流も、それは否定しなかった。力があれば何でも出来る、そこまでは思っていないかったが、あつた方がやれることは多い。彼は常々そう考えていた。

「関節外しが懇切丁寧かよ。お前の場合ちゃんとはめていくからむしろ性質わりいよな。変にお人よしなのによお」

「お人よしなあ。俺は視界に写しといて知らん振りするのが寝覚め悪いだけなんだけどな」

「そついうのがお人よしなんだよ…なんで俺、お前とそこそこの付き合いしてんだろうな。ま、お前を嫌ってるやつなんてあんまいねえよな。何でだ？」

「俺に聞かれてもな。みんな俺に癒しを求めてるんじゃないか？」

「だははははははっ！ どの口で言ってるんだよ！ ま、俺はもう行くぜ」

「はいよ、気いつけてな」

「おう。じゃーな」

何の変哲もない日常。俺はいつもどおり帰路につく。  
非日常なんてものは俺の日常はない。

喧嘩に誘われたのは非日常ではないのか？ 答えはNO、頻繁ではないがわりと日常的なものだ。今回は俺が出ていけばパワーバランスが崩れそうなので遠慮させてもらった。分が悪そうであれば友人のよしみで参加してみたりするのだが、今のところは無敗である。そもそもうちの高校とS高の仲はそれほど険悪ではない。無論いいわけではないが、今日のような衝突はままあることだ。

ある意味小戦争をして日頃の憂さを晴らすといったところか。ルーなど欠片もないがそこには暗黙の了解のようなものがあつた。全体の勝敗などはあつてなきようなもので、双方の数がある程度まで減れば自然に収束しめいめいに去ってゆくのだ。

俺の力は彼らの間で無闇にふるってよいものではないと思う。少々ベクトルが違うのだ。いうならばアマチュア戦に空気も読まずプロが入っていつて優勝するようなものか。たまの参加でもやるのは何の細工もない殴りあいだで武術は使わない。

一般家庭に生まれ、普通に育てられ、こうして普通の学校に通っている。だが、俺は『変人』と呼ばれるようなものに育ってしまった。それでも大衆に排斥されないのは、俺が処世術に長けているせいだろう。俺のようなものはある意味異端となるのだろうか？

実のところ、俺の根本にある特性は『臆病』だ。何かに害されることに怯えながら、だからこそ貪欲なほどに力を求め、自らを守る術を身につけた。他人の顔を読み心を読み人間関係におけるあらゆる軋轢を避けてきた。常に強い自分をイメージし、仮面どころか着ぐるみを着込み臆病な自分を知られないように隠している。…今ではどちらが本当なのかは分からなくなってしまう。何せ俺の心は何にも震えなくなってしまうたのだから。起伏が少なくなつた、と言ひ換えるべきか。喜怒哀楽の感情こそあれど、それらも自分の演技なのかどうか分からないほど希薄だった。『不動の心』などと言えば聞こえはいいが、プラス方向の高揚感などすら俺は忘れてしまっている。

だから俺は求めているような気がする。俺の全てを揺るがすような非日常を、だ。

だから死後の世界などというものを知った俺は罰当たりにも喜んでしまったのだ。きつところは、俺の知る日常なんてなくて非日常に溢れているのだと。

もう、日常には戻れない。そんな事実も飲み込んで。だから俺はせめて俺の日常にあった人たちに謝った。こんな人間味に欠けた人間でごめんなさいと。

「地獄行きじゃ！」

目の前の、でつかいいかつい男が俺にそう言った。『閻魔様』だと、彼は名乗っているが、自分で『様』とかどうかと思うよ。

親より先に死んだのに、賽の河原なんてものはなかった。いや、というより十四歳以上なら関係のない事らしい。好きで死んだわけでもないのに、流石に十三歳以下で死んでしまった子供が可哀想に思えた。

しかし、地獄行きとはどうやら俺は悪行を積んでいたらしい。はて、自覚は無かったのだが。

『閻魔様』が手に持っているこれまたどでかいハンマーのようなものをガツンと机に振り下ろすと、ぱかっとな俺の足元の地面が開き俺はまっさかさまに落ちていった。

そもそも何故俺が死んでしまったのかといえば…特に特筆することでもない。この落ちていく時間のうちにはぱつと終わる程度のことだ。

貯金を下ろそうと銀行に何も考えずに入ったが運の尽き。どうやらかなりてんばっているらしい銀行強盗が銃を振り回して銀行員を脅かしていたようだ、そこにこのこと自動扉を開けて入ってきた俺は半ば錯乱状態の銀行強盗に頭を打ち抜かれた。

人間は頑丈なくせに妙に簡単に死んでしまう。今回は鉛玉だったので頑丈もくそもないが、とにかく俺はあっさりと死んでしまったのだ。

どくん

しばしの空中落下を楽しんだあと、俺は足をクッションに不毛の大地へと降り立った。すごい音がしたが、別に足が折れたとかそういうことはなく無傷である。なにやら生前より身体がずっと軽く、ずいぶん強くなっているような気がする。死んだからだろうか。いやわけ分からん。

俺の降り立った地獄とやらは、真っ暗なのに妙に蒸し暑い。地の底から響くような叫び声もどこからか聞こえてきてかなり気味が悪かった。

「がははっ新入りか！　ここ、地獄で自分の罪を悔いると良いわ！　太陽の無い空をなんとなく眺めていると、ぞろぞろと鬼がやってきた。鬼と分かったのは角があるからだ。いや、彼らが鬼と自己申告はしてないから（仮）になるのだけど。赤とか青とかそんなことはなくて、灰色？茶色？よく分からないがそれ系の濃い肌の色をしている。悪い意味でこの地獄にマッチしているのではないだろうか？



因みに彼らはかなりマッチョだ。その肉体美が身体の細い俺にはとても眩しい。

しかし見に覚えの無い罪を悔いると言われても実感が湧かない。折角なので、抵抗させてもらおう。鬼と戦うのも、なかなか乙なものだ。いやむしろ楽しいかもしれない。

「はっ、連れて行きたきゃ力づくできな！」

「亡者風情が生意気な！」

ほああ！ 棘つき棍棒なんて、ずるい。

「閻魔様、閻魔様！」

「なんじゃ騒々しい。何かあったのか」

「あの、地獄に落とした魂のうちでミスのあるものがあったのですが、『輪廻の環』の修行中で、次の転生を終えた後に神霊に昇格するはずの魂なんです。確か今世の名は『留見 流』だったかと…」

「な、何じゃと！ 確かにそのような者を地獄に落としたはず…いや、ちよっと待つんじゃない！ 書類には確か地獄行きとあったはず…」

「…それはもう何百年も前のものですよ！ 毎度毎度机の上を片付けて書類を整理するように言ってるでしょうが！ 『ワシには分かるから問題ない』ってこんなことになるからいちいち注意してたっていうのに…」

「な、なんとということだ…どどどどうすれば…そういえば、その地獄に墮としてしまった流とかいうものは何をしているのだ…」

「現在、地獄巡りをしております…」

獄卒の鬼をばこぼこにした後意気投合し、あらゆる地獄を体験している真つ最中です。既に大焦熱地獄、黒沙地獄、無間地獄、等活地獄、大叫喚地獄を踏破されました…」

「馬鹿な！ 人間程度の剥き身の魂が耐えられるものか！ 消滅してしまうに決まっております！ そもそもあやつを地獄に送ってそれほど時間は経っておりますぞ！」

「『地獄』では個人の主観においての時間の概念なんて無きにしに有らずですよ。外界にとつての一秒が本人にとつての千年に匹敵することもさらにあるのですから。…それにあの者の霊格は桁外れです。そんな強靱な魂が肉体（器）に阻まれず剥き身のままにいるからこそあらゆる地獄を耐えうるのですよ。そもそも、修行の初期段階としてこの魂は数百年前の時点で地獄巡りを終えています」

「ぐ、ぐ、ぐ、そんな者を間違いで地獄に落としてしまったことが知られれば…ぐぐぐ…」

「ど、どういたしましょう」

「…その男をよべ。こうなったら太古の畜生道に転生させる！ 書類には『輪廻の環』に耐えきれず魂が消滅してしまったとでもしておけばよい…」

「そ、そんな！ 神霊一步手前の魂を畜生道に墮とすのはまずいですよ！ あの男はむしろ神仏になるはずの魂なのですよ！ それを罪人道の畜生道へ！ それにあれほどの霊格のモノを、畜生道といえどつかつに下界にやればどうなるか…」

「黙れ。お前にも、家族はいるだろう？ あまり、心配させたくはないのではないか？」

「そ、それは…分かりました。あの男をよびます…」

なんか地獄制覇して次は何しようかと鬼達と話していたら呼び出された。…そういえばそもそも何で地獄巡りしようとしたんだっけ。暇してたら、鬼達に勧められたからだったか。は、もしかして俺鬼に乗せられた？ いや、狂気と正気の狭間は得難い経験でしたが。いやはや苦痛と苦悩と苦難で幾度も俺の精神が消し飛びかけました。ナニカ。そんな刺激が止められない止まらない。あ、俺はMな人じゃないよ。

いやいや、今はこっちが重要か。

「お前は未開時代の畜生道行きじゃ！」

何故に。

目の前にはまたあのでかいかつい男。男は手に持つ槌をふってそう叫んだ。

なんか悪化してるし。あれだろうか、俺が地獄をアトラクションにしていたのが癪に障ったのだろうか。折角だから鬼と酒を酌み交わしたかったんだが。そういえば釜茹で地獄がなかったなあ。なんだか温泉に入りたくなってきた。

それはともかく問答無用で畜生道も納得がいかないのです、とりあえず理由を聞いてみる事にする。

「あのー。俺の罪状ってなんなんですか？」

「黙れ黙れ！ 罪人が惚けるでないわ！ さっさと行ってしまえ！」  
ぱかっ

納得いかないなあ。まあ何かあればいいんだけどなあ。

キューー キューー

次に意識を覚醒させた俺が最初に聞いたのはそんな鳴き声だった。そして目を開けて最初に見たのは白くて大きい、二本の尻尾を持つ狐だった。

なにこれすごい。

導入なんてこんなもん（後書き）

こんな感じに時間、場面はブイブイ進みます。きっと次回は狐っ娘  
になっていることでしょうね。多分。

畜生道なめんな おや…？狐の様子が…（前書き）

一話だけじゃ良く分かったので急遽書き上げて二話目です。時間軸が飛び飛びですが、早く進めたかったのでごらんの有様です。

文章ばかりですが、なにぶん主人公一人ですので会話ありません。

畜生道なめんな おや…？狐の様子が…

昔々大昔に狐に生まれて早七百年。正直もう生物として長生きつてレベルじゃないぜ。二尾の白狐の母を見て仰天したのも今では懐かしい。

そもそも母含めて兄弟達とともにいたのは生まれて一年程度だった。みな早々に巣立ちをすませ散り散りにどこぞへと去っていったのだ。母狐ですら『夫捜す』的な事を言っただけから出て行ったのだからこの時代の狐はまあずいぶんとアグレッシブだと思ったものだ。

実際、俺の知る現代と比べると狐に限らずこの時代に生きる生き物はどれも強かった。俺とて別に肉球パンチで戦うわけではないが、生体エネルギー？的なものを丸めてぽんぽん外敵に放り投げそのうちに逃げ出すといった風に生き延びてきたくらいだ。

それに異形の者を見ることもままあった。巨大な蜘蛛であったり、ぬめぬめした蛇なようなものだったり、足がいっぱい生えているのに胴体がどこにあるか分からない謎生物だったりと正直俺の知っていた世界とはまるで違う。

まあとはいっても俺もその化け物連中とある意味同類なわけでした。

母狐が二尾だったので、俺は母狐がいわゆる妖狐ではないかと考えていた。ちなみに生まれた当初の俺の尻尾は一本である。あたりまえだが。それはともかく、妖狐ならばもしかして人間に化けられるんじゃないかと俺は考えたわけだ。何せ獣の前足でできることなどたかが知れている。俺は以前のような便利な両手が欲しかったのだ。

が、この世界で百年を過ぎたあたりで俺はほとんど諦めていた。狐

の身でありながらこれだけ長生きするのも驚くべきことであつたが、しかし百歳になつても俺は一尾のままだつたのだ。その上身体は1m足らずで、大して成長もしていない。母狐は少なくとも全長2mはあつたのに。そもそも尻尾が増える事はともかく人型になれることには微塵の保証がないのだ。長らく生きてきたが、人型の生き物は今のところほうほう言つてるけどとりあえず二足歩行はしている猿八割人二割のものしか見た事はない。案の定意思疎通ははかれなかつた。というか食べられそうになつたし。原始人(?)こわい。

そんなこんなでさらに数百年は各地を転々としながら細々と生きながらえていたのだが、転機が来たのは五百年目のことだつた。

その日は、朝起きてからとにかく違和感しかなかつた。風景がいつもと違つて見えたり、動きにくかつたりとそんな感覚を意識しながらとりあえず俺は四肢に力を込めた。

そこでようやく気づいたのだ。自分に手足があることに。五百年ごしの人間の身体だつたために違和感を感じるとは、ずいぶん狐の身体に慣れてしまつたものだ。

ぶるぶると生まれたての小鹿のように足をふるわせながら立ち上がり、俺は自分の身体をよく観察してみると、身長140cmほどの少女、幼女?になつていた。…今更女になつて驚かない。そもそも狐に生まれたときから雌というカテゴリだつたのだから。そして雌であることに違和感を感じる前に狐であることに違和感を感じていたため、いつの間にか自身が雌であることには慣れてしまつていた。まあついてるかついてないか程度の差だつたわけで。人型になつた後もそれはあまり変わらない。

人型になつた俺の身体は狐状態だつたとき同様非常に小さい。狐だつたときよりも大きいは大きいが人間の中であれば小さい部類に入るだろう。



狐状態の俺の体毛は白だ。別にキタキツネだとかそういうわけじゃない。森の中でまるでカモフラージュできないその身体に頭を抱えたのは一度や二度ではなかったが。それはともかく人型になった今もそれは変わらず、真っ白な髪に真っ白な肌となっていた。また頭には真っ白な狐耳があり、腰には二本の尻尾があった。二尾になるまで五百年かかるとかどんだけーとか思った俺は悪くない。

ところであまりの衝撃にスルーしていたが、人型になった俺はなぜか服を着ていた。今まで狐として裸一貫で過ごしてはいたものこのうして体毛のないすべすべの身体になった今では服がある事は非常に助かる。しかしなんでこうなったのが全く分からない。結局突然人型になったこと以上に不毛だったので考える事は止めてしまっただが。

袖や裾で広がっているずいぶんとゆったりとした単純なつくりの白い着物、といったふうなデザインなのだが、妙に身体には馴染んでいた。それこそ狐だった頃のあることがもはや自然だった体毛のようなんだ。つまるところ、これはその代わりのようなものなのだろう。

その後二本足では歩きなれない、というか歩き方を忘れてしまった俺はふらふらしながら近くにあった泉へと向かった。逃走手段として生存本能の賜物かいつのまにか空を飛べるようになっていたが、今回は徒歩を選んだ。早いうちに身体に慣れる必要があったのだ。さもなければミミズやらアリやらに食べられてしまう。無論魔改造的なミミズやアリだが。五百年と比べてずいぶんと力の増した俺だったが、この身体がどれほど使えるか分からないような状態ではどうにもならないのがこの世界の法則だ。

水面を覗きこんでみると、表情に乏しいが、狐の時とは違う丸い瞳孔の金色の瞳を持つ掛け値なしの真っ白な美少女がこちらを見てい

た。ぺたぺたと顔を触つてみると、水面に映った少女も華奢な手を顔に当てていた。どうやらこれが俺らしい。ちなみに表情を変えてみようとかぐにぐに口やら頬やらをいじつてみたが、ほとんど無表情なままだった。どうやら俺は表情筋の使い方も忘れてしまったらしい。

さて話は戻るが、人型になったことを契機に俺はこれまで定住地を捜していた。人型になった俺の身体が相当ハイスペックである事を知ったためだ。ここ二百年は逃げる事を止め負け知らずである。もう住まいを転々とする必要はない。

五百歳になってから二百年、いい場所を見つけたのはそんな時だった。

俺は人型になったことをいいことに、行く先々で畑を作っていた。食は暇を潰す重要なファクターのひとつだったためこれは外せなかった。そしてそれに最適な場所をようやく見つけたのだ。

俺は畑のそばに小さな小屋を建ててそこに住む事にした。

畑には今まで集めてきた様々な植物が植わってある。にんじんみたいな大根だったり、植木みたいなブロッコリーだったり、毒のあるピーマンだったりもどきの類がかなり多いが、それでも俺は満足だった。

さて、ようやく安定した生活に入った俺は太古に生まれてほとんど諦めていたことに着手することにした。

そう、『S a k e』だ。

俺は人間だった頃酒が好きだった。

未成年ではあったが、隠れてよく飲んだものだ。初めての出会いは、酔拳を試みたときだった。いやいや、あの頃の俺はまだまだ若かつ

た。無論酔ったところで酔拳が出来るわけではないのでそちらは失敗したものの、俺にはそれ以上の収穫というか出会いがあったわけだが。

幸い、以前各地を放浪していたときに稲を見つけていたので、原料は何とかなる。…そういえば日本に野生の稲なんてあっただろうか。いや、元の世界を基準に考えても仕方ないか。そもそも諸説はあっても事実なんて現代には残っていないし。

稲の量産に二十五年、とりあえず飲めるものができるまで八十年。あくまで『飲めるモノ』 『液状のナニカ』であり、正直言って不味い、不味すぎる代物だった。むしろほとんど何も知らずにここまで来れた俺を褒めてやりたいぐらいだったが。時間がいくらでもあることは幸いだった。酵母菌の用意に特に苦労したのもいい思い出だ。

その手法を主軸に、結局妥協できるものが造れるようになったのは三百年後のことだった。その頃には俺の尻尾は三本になっていたが、それもおまけのようなものだ。俺の知る時代のものには未だまるで敵わないものの、長い時をかけてようやく作り上げたという達成感 はたまらないものだった。

ところで、さりげなく毒ピーマンとやらがあっただが、俺には毒は効かなかつたりする。それは俺自身の持つ能力のせいだ。

『式を司る程度の能力』

生まれた時から、俺はこの能力の存在には気づいていた。が、俺は大して役に立たないものだと考えていた。能力の特性か数字の類には滅法強く、円周率など億単位で小数点以下が出せるが、正直野生

に生きる俺には意味がない。他に冠婚葬祭司ってどうすんねん、神職でもするんかいなとかやさぐれていたが、この能力の便利さに気づいたのは落ちていた木の実を広い食いしてしまった時だった。小さい林檎のようなその木の実は実のところ非常に毒性の高いもので、特定の動物しか食べられないようになっていた。しかし、俺はそれをつかつにも口にしてしまったのだ。が、俺が毒に苦しむ事はなかった。食べた途端その毒の化学式が頭に浮かび、同時にそれを無害なようにばらばらにしてしまったのだ。なんらかの化学反応を生じたわけではなく、超上の力で無理やりだ。

それからは、今までは大して調べようとはしなかった能力頻繁に試してみるようになった。基本的には数式を解く時などに自動的に発動しているようになっていたが、化学式を操ったように意識的に使うこともできる。

空気中の分子式がいじれる事を知った時は特に驚いたものだ。同時に反則すぎる能力にも呆れたが。これで地球温暖化も解決だあとか思ってみたが、今はまだ手元の式しか操れないのでやってみたくて焼け石に水だ。そもそもそんな世界的問題もずいぶんと先の事のことだ。

今は爪の先ほどのフラーレンを作ってみたり、石を放り投げてあらゆる障害に至るまで計算しつつくし落ちてくるまでの時間を誤差なく割り出してみるとか地味な使い方しかしていないが、未来ではとてつもなく使える能力となるだろう。特にネットワークでも発達すれば俺の独壇場だ。定められている一定の方式でつくられた世界は俺にとって鴨もいとこらだろう。

そんな事を考えながら、また何年も酒造りや農業、能力開発にいそしむのだった。

俺の知らないことはまだまだいくらかでもある。能力同様幼い頃から知覚していた生体エネルギーのことも未だによく分からない。結局俺だけでは説明させることはできなかった。俺が俺にとっての武器であり生命線であるこれの正体を知ったのは、それから千年ほど経った頃。狐になってできた初めての友人に教えられたのだった。

畜生道なめんな おや…？狐の様子が…（後書き）

いつになるかは分かりませんが三話目は他キャラ登場ですね。原作キャラじゃありません。えーんはもっと先だったりします。びつくり。

色々と 違う気がする 日本神話（前書き）

また投稿です。はじめは縛りが少ないのでわりと書けるんですけど…

作中ではまた時間が飛びました。こんな飛び飛びで、大丈夫でしょうか。

また、今回からオリ設定がやってきました。さらに話を作るために日本神話まで蹂躪してます。ひらにー

## 色々と 違う気がする 日本神話

俺の尻尾が丁度五本になったところ、二千歳になったところだ。正直この世界に来てからは時間感覚がおかしい。というより多分地獄にいたせいで元々おかしかったのがさらにおかしくなったような…まあいいや。正直一年なんてそれこそ『あつ』と言うまで、人間の頃の感覚で言えば千年が三年程度のものだ。特に何の代わり映えもしない毎日で、自分の中でかなり画一化されているのかもしれない。そろそろ変化が欲しいなあ…

そんなわけで俺はその日も造った酒を大きな瓢箪に詰めて、その瓢箪をなんとなくぶんぶん振り回しながら森をふよふよと飛んでいた。最近日課の散歩だ。飛んでいるのに散『歩』とはこれいかに。まあようするに暇つぶし兼不思議探しといったところで。

昔と比べて酒醸造の技術もずいぶんと向上していたが、『清酒』と呼べるようなものができてからは少し行き詰っていた。俺が半ば満足してきたということもあるだろうが、今は長持ちするようなものを試行錯誤している。

能力を使つて一気に糖をエタノールにしてみたりだとか裏技をしたこともあったが、妙に味気ないものになる事を知つてからは普通に作っている。俺の能力は広い分野に渡って使える便利な代物だが、その反面非常にデジタルで融通が効かない時がある。なので、時間をかければできるようなことは大抵能力を使わずやっていた。その方が日常にも味があると言うものだ。

また能力を使つて構造式をいじり、リアルダイヤモンドダストとか馬鹿みたいなことをやってみたが、正直ダイヤモンドはフラール



ンやグラフィイト以上に燃費が悪かった。俺の能力はパッシブならばともかく、意識的に何かを操るとそれに比例して俺のエネルギーは削られてゆく。その上多量の炭素元素をいじる必要があったせいで、いくらかダイヤモンドを作ったらほとんど動けなくなってしまう。効率悪すぎ。

さて、普段は何もなかったり、話の通じない非常識生物と遭遇したりとそんなことばかりだったが、その日は違った。

いつも通り『てーれれーてー』と意味のない音律を鼻歌交じりに口から垂れ流しながら森を徘徊していると、突然がさがさと近くの茂みが揺れた。俺は、すわ敵でも出たかと謎エネルギーを溜めて臨戦態勢をとった。普段はエネルギー玉をばらまけば大抵の相手は逃げてゆく。それでもこちらに向かってくるものは体術で相手をしていった。そして尻尾が五本に増えた今、力もそれに伴ってずいぶん増した。人型を手に入れた時からの不敗記録は未だに続いている。

果たして、茂みから現れたのは、一人の男だった。

正真正銘、男である。完全に人型の、男だ。

「おおお？」

俺は突然の二千年ぶりの人間？との邂逅に、声にならない声をあげた。男は上下のある布でできた服を着込み、腰には剣を下けている。俺は溜めていたエネルギーも霧散させ、しばしの間呆けていた。何せ久々の意思疎通のできそうな相手だ。例え彼が俺にとっての敵であったとしても、羽根四枚体長一メートルの蝙蝠や群れをなして襲ってくる肉食のダンゴムシよりも断然いい。

しかし、驚いていた俺はあることに気づくことに遅れてしまった。さらにそれは俺にとって致命的な事実だった。

この男、俺より強い。

しかも、男が俺に殺意を持って腕を振るえば、それだけで俺は一瞬で散り散りになるだろう。それほどの絶望的な差だ。

どうやら俺はずいぶんと慢心していたらしい。こちら一帯の誰にも負けないほどの力を手に入れて、かなり浮かれていたようだ。だが俺はこれほどの相手を前にして、恐れてはいなかった。むしろ今の俺には歓喜しかない。鉄面皮な表情はまるで動かないが、心中では確かに笑っているように思う。

仮に致命的であろうと、俺にとつて死は障害ではない。むしろ退屈のほうか敵だ。そんなことを考えてしまう俺は、本当におかしくなってしまうたのだろう。

おかしな声を上げてからまるでしゃべらなくなった俺を前に茂みから出てきた男はしばらく黙っていたが、俺が再び口を開く気配がない事を悟ると、一言こつ言った。

「又シは、何者だ？」

これはまたずいぶんと哲学的な問いだ。残念ながら俺も自分の事は大して知らない。せいぜい『俺』自身であることと雌狐であることぐらいだ。

そもそもこの男は何者なのだろうか？ 俺や謎生物が持っているような気配、謎エネルギーとは違うものを、この男は放っている。どうやら俺のようなカテゴリ化け物ではないようだし、俺の知るこの時代のヒトはあのウホウホ達なはずだ。たかが千年やそこらでこんな人間状態になっているとは到底思えない。いや、仮にこの時代の生物が異常な進化スピードだとか言われてもまあ仕方ないのかなと納得するしかないが、だがこの男の持っている膨大な力は人間に力

テゴライズするには到底大きすぎる。

「俺は見ての通り狐だろうが。あんたこそ何者だ」

「我か。我はヒトだ」

「嘘付け」

ついそう言ってしまった。

しかしこれほどすごい力漲らせながらヒトなどとはおこがましい。むしろ「私は神です」とか言ってくれる方が頷ける。今の俺は寛容だ、そんな超常存在だって受け入れられるほどにな。わはは。

「本当だ。名は『伊邪那岐』という」

「ぶはっ」

え、ちよつと待って。え、いざなぎ？ なにそれこわい。

「『伊邪那岐』という」

「二回言わんでも聞こえとるわい。イザナギで、え、神様？」

「神か。間違いではない。我はヒトであると同時に神でもある」

こいつはいったいどういうことだ。イザナギといえば日本神話最古の神ではなかったか。どうしよう、なんかよく分からないことになってきた。いや、面白いんだけどね、ただ超展開過ぎて。国産みの一柱を前に俺にいったいどうしろと。

「それで、主の名はなんというのだ？」

内心でおろおろとしていた俺に構わず、イザナギは今度は俺に名を問うた。名前はイザナギが勝手に言ったことだが、しかし相手に言わせといて自分が言わないのは俺の礼儀に反する。

…しかし困った。名乗りたいのだが、俺には名乗るべき名がない。何せ狐になってから今まで必要のなかったものだ。

『留見流』。これは、前世での名だ。男でも人でもなくなった俺に、この名を名乗る気はない。

「悪いが…今まで名前は必要なかったからな。俺には、名前が無いんだ」

俺がそう搾り出すように言うと、イザナギは驚いたように言葉をまくし立てた。

「名を持っておらぬのか。力有る者にとっては真名とは何よりも大切なものであるのだぞ？」

「そう言われてもな…無いものは仕方ないだろう。何なら、あんたがつけてくれよ」

「我がか？」

「そつだ。どうせ呼ぶのはお前ぐらいしかいないしな」

俺はイザナギに託すことにした。自分でつけるよりも、他人につけてもらったほうがなんとなく気分が良かった。名前とは、ある意味祝福だ。真名とは何よりも大切なものだと言ったイザナギはある意味正しい。短い音、文字の中に、つけた者の願いや想いが込められ

る。それはとてもいいものだと思っ。

俺がイザナギに頼むと、イザナギは顎に手を当てて考え込んでしまった。俺としては嬉しい限りだが、そこまで悩んでくれなくても。

「そもいかん…真名が又シ自身に方向性を与えることもあるだろう。だからこそ相応しいものをつけねば」

名は体を表す、まさに言の葉に込められた祈り、言霊といったところか。特にイザナギのような力を持つものなら、名を付けた者に与える影響も大きいような気がする。

「うむ、思いついた。又シの名は、『ウカノミタマ』にしよう」

「ウカノミタマ？」

どこかで聞いたような。

「うむ。実は以前から妙な気配が森にあることは気づいておったのでな、又シの住まいの近くまで行った事があるのだ。又シは確か食物の世話などしておったな。その時は珍しかったので見ていたけどたのだが。ともかく、だからこそウカノミタマという名前にしたので」

え、全然気づかなかった。俺もまだまだ未熟ということか。てかイザナギ相手じゃ分が悪すぎる。仮に俺の力を与えると、イザナギは200000といったところか…うん、絶望的だな。

「『ウカノミタマ』になんか意味でもあるのか？」

「倉稻御魂。これには穀物や食物の神という意味があるのだ」

「ええ！ 神ってなあ、自分で言うのもなんだが俺は得体の知れない狐だぞ？ そんな大層な名前をもらってもいいのか？」

「『神』とは大なる力を以って世界に干渉するものの事を言う。又シほど力のあるものならば、構わぬだろう」

神の定義ってそんななのか。今の時代はそれが普通なのだろうか。というより、俺って一応力の強いほうだったんだな。イザナギと差がありすぎて自信消失していた。ということは今まであつてきた謎生物たちはこの世界の底辺なのだろうか。そんな連中相手に最強気取ってた俺、恥ずかしい！  
とにかく、イザナギにもらった名前はありがたくいただくことにしよう。イザナギがわざわざ頭をひねって考えてくれたものだし。

「ウカノミタマ、ウカノミタマ…うん、いいと思う。あ、ウカノミタマじゃちょっと長いから、呼ぶ時は『ウカノ』って呼んでくれ」

「うむ、承知した、ウカノ。では我のこともイザナギと呼ぶとよい」

「分かった、イザナギ」

そうして、俺達は少しの間笑いあった。

「ところでイザナギ、俺に『何者か』って聞いてたけど、見れば狐って分かるだろう？ それに畑の世話してただけなのに珍しいって何でだ？」

「む？ ウカノは『禍物』<sup>まがもの</sup>であろう？ 人のような姿をした『禍物』は、ウカノがはじめてなのだ。それに『禍物』は総じて知能が低い。

まさか畑を作り食物を育てているものがいるとは思わなんだ」

「待て待て待て。ちょっと待て。俺は『禍物』なんぞ知らんぞ。『禍物』って何だ」

「『禍物』とは『禍気』によつて変質した生物のことであるが。又シも大量の『禍気』を放っているではないか。紛れもなく『禍物』である証拠だ」

「また分からん単語が出てきたぞ…『禍気』って何だ？」

「むづ…『禍気』から説明するとなると長いのだがな？ 構わぬか？」

「…できるだけ簡潔に頼む」

「承知した」

『禍気』。

これを話すにはまず世界の事から、と説明された。

ずいぶんと昔の事、世界に大地ができた頃は争いが絶えなかつたらしい。そのせいで穢れがたまり、地上はずいぶんと汚染されてしまった。当時は地上はもう少し広がつたらしいが、この穢れから逃れようとした者達がある場所の要石とやらを抜き、結果的に大地は天界と地上に別れてしまったそうだ。その時の余波で地上の生命の八割から九割は死滅してしまつた。そのような大異変が起きてしまつたために、地上はかなり歪んでしまつたらしい。

そのままでは全てが崩壊する危険すらあつたため、世界はむしる歪みをカタチとして現出させることで安定化を計つた。こうして世界

の歪みがカタチになったもの、それが『禍気』だ。

今では地上に欠かせないものらしいが、元が歪みだったために影響も多々出てきた。それが『禍気』によって変質してしまった生物、『禍物』だ。

どうやら俺の生体エネルギー？だと思っていたものは、この『禍気』とやらだったようだ。

ついでとばかりに話してくれたが、イザナギは崩壊の危機は免れたものの未だに若干不安定な状態が続いている地上を調整するために天界から期限付きで降りてきたらしい。万が一地上が崩壊すれば、連鎖的に天界が崩壊するのは確実なので、必要なことなのだそうだ。

それにしても、『禍物』か。今までみてきたトンデモ生物達は、進化の過程をすつとばして魔改造されてたんだな。妙に機能的ではなさそうなものも多いとは思っていたが。それに、人型のものに遭遇したことがなかったのは俺以外にいないからだったようだ。その上、『禍気』を丸めてみたり空を飛んでみたりしていたのも俺ぐらいだ。俺だけ他と違うのは、中身が俺なせいなのだろうか。

「ウカノよ。こうしていつまでも立ち話をしていても仕方あるまい。我の今住む地へ来てみぬか？ 招待しよう。我だけウカノの住居を知っているのでは、不公平であるしな」

「ん？ そうだな…ここから遠いのか？」

「歩いていくのならば、二日ほどかかるであろうな」

「なんだ、すぐじゃないか。行く行く、今から行くつうすぐ行くつう」

折角出会えた話し相手と早々にサヨナラでは、はなはだもったいな



い。そう思った俺は、案内するというイザナギにほいほいついていくことにした。しかし、同時に俺はイザナギの言葉に疑問も感じていた。

俺がこの地に住んで千三百年ほど、ここら一帯は大体探りつくしてははずだったのだが、イザナギの住居はここから二日程度行ったところにあるという。ならば、何故今まで俺はそれを見つけられなかったんだ？ ……こんなに真剣になって考えてるのに、これで、数日前に越して来まして、なんてオチだったら怒るぞ。

色々と 違う気がする 日本神話（後書き）

イザナギさん登場です。出す必要があったので出してみました。

ウカノや『禍物』は妖怪のプロトタイプです。ちなみに『禍気』  
妖力です。

あ、はじめまして、奥さん（前書き）

朝出て夜帰りとか書くヒマねーですよ。寝る時間削るとか本末転倒なような気も…

四話目です。かなりオリ神話になってきたような気がします。あ、ヒルコとかも普通にいません。神話をいちいちなぞるのはさすがに時間がかかりすぎます。

あ、はじめまして、奥さん

夜が来て朝が来て夜が来て朝が来て。

今も昔も、空の顔は変わらない。いや、この時代の方がより澄んだ色をしているだろうか。科学など微塵もないこの世界では、自然のままの大気が広がっている。そんな空気の膜を通して、目には綺麗な空色に映るのだろう。

とはいえ、人間だった頃の空を見ていた時間と狐になってから空を見ていた時間は断然にこちらの方が長い。最近では昔、時系列的には未来の空色の方が夢に思えてくるほどだ。

空に限った事ではなく、前世の記憶はずいぶんと薄れてきた。実際、前世で縁のあった人達の顔はもうほとんど思い出すことはできない。自分の顔に至ってはとりあえず目と鼻と口がついていた、ということぐらいしか覚えていないのだ。…それもう完全に忘れてるだろうという突っ込みは受け付けていない。きつともう一度見たら思い出すことができるんだ。多分。

雲を見ながら胡蝶の夢について考えていると、イザナギが突然立ち止まり俺に向かって口を開いた。

「ここが、私の住処だ」

「…?」

既に昨日の内に森を抜け草原を歩いていたところだったが、イザナギはこの草原のど真ん中で立ち止まった。しかし、周囲にはそれほど高くない草しかない。風が吹くたびにさわさわと静かにざわめき

とてもよい雰囲気、だが建物らしきものはどこにも、まるでない。  
…はて、こいつは地面に穴でも掘って住んでいるのだろうか。おい  
おい神様、いくらなんでも泥臭すぎだろ。モグラかよ。

「ウカノ、何か失礼な事を考えておらんか？ 又シの目に憐憫が見  
えるような気がするのだが。…ふうむ、まあ、少し待て。開<sup>ひらけ</sup>」

俺が口を開かず目で自身の心情を語っていると、イザナギは心外だ  
とばかりに一言<sup>コトダマ</sup>とともに右腕を振った。

ぴしりと、何かが切り替わったような空気を感じるとともに、俺の  
視界には突如高床式倉庫が現れた。正倉院と言ってもいいかもしれ  
ないが、実際はどちらとも造りが違う建物だった。大体は木造で、  
屋根も瓦葺ではない。さらにこの建物の屋根は『へ』のような形で  
はなく、『ノ』である。それほど鋭角でもないが、ずいぶんと斬新な  
デザインだな。ログハウスというには造りが簡単だが、この草原に  
は妙に合っている気がする。

しかし、そこにはさつきまで何もなかったはず…いやちよつと待て、  
俺はさつき周囲を見回した時確かにこの建築物を目に映していた、  
ような気がする。いや、確かに視線をやったはずだ。なのにどうし  
てもう一度目にするまでこうして認識できなかつたんだ？

「さて改めて。ここが我の住処だ。ふ…どうやら驚いたようだな、  
我の屋敷の威容に」

「威容というか異様というか。つかそもそも建物そのものに驚いた  
んじゃないよ。なんなんだ？ さつきのは。イザナギが何かするま  
で、これは確かに見えていたはずなのに認識できなかつたぞ」

「そのことか…。何、屋敷の周囲に我が結界を張っていただけのことだ。視覚聴覚触覚嗅覚ついでに味覚、対象特定に必要な情報認識を阻害し、また正しくこの場所を認識できないものはここに入る事はできないようになっておる。とは言ってもこの結界はそれほど強力なものでもない。こうして一度認識してしまえば、再度先の結界を張ったところで一度根付いた認識を阻害する事はできんからな。阻害でなく認識遮断結界などでも張れば、別ではあるが」

つまり五感で捉えてはいても、それを明確に意識することができないということか。

しかしそれよりも、この世界では『結界』などという空想技術もまかり通るらしい。いや、そんなことも今更。『禍気』だとか『禍物』だとか、以前は非常識だ非科学的だといえるようなものが蔓延っているのだ。仮に『魔法』が出てきたところで俺はもう驚かない。

…この時代からしてみれば未来の科学技術の方が『魔法』か。

「…んー？　そもそもこの『結界』はイザナギにとっては技術なのか？　それとも能力だとかで感覚的に作っているのか？」

「いいや。一定の法則にのっとり正確に結界術式を構築し、私の神気を燃料とすることで起動させている。石を投げた時こめた力によって飛ぶ距離が変わり、また法則に従って地面に落ちるだろう。本質的にはまるで同じものだ、影響力が違うのだがな」

「ふうん…『結界術「式」』と言ったな？」

「うむ。何故そこまで念を押すのだ」

「いやいや、ただの確認だ。イザナギ、この『結界』というやつを俺に教えてくれないか？　いざという時に役立ちそうだ」

能力の新たな分野の開拓。いくら俺とてゼロからこんなよくわからんものを組上げるのはおよそ不可能だ。が、『結界』の術式を知る事ができれば、そこからさらに応用範囲を広げていくことは可能だろう。雛形さえあれば、あとはそれを組み替えていけばいいだけだ。それに、そうして試行錯誤して新しいモノを作っていくという快感は何事にも変えがたい。酒造りに何百年もつぎ込めたのも、造る過程も結果も俺にとっては娯楽のようなものだったからだ。

「教えるのは構わぬが…我が術式に使っているのは『神気』と『靈気』だぞ。又シは『禍気』を扱えるようだが、私の知る術式にそのまま使うことはできないのではないか？」

それは織り込み済みだ。式の根本の仕組みを理解できれば、機構を『神気』『靈気』？用から『禍気』用に変換することが出来るはずだ。まあそのためにはイザナギの『神気』『靈気』？を詳しく知らなければいけないだろうが…それも含めて教えてもらおう。いざとなれば、時間をかけて試行だけ繰り返していけばいい。いつかはできるだろ。

「いや、いい。術式、あるいは基礎だけでも教えてくれたら、こちらで何とかしよう」

「ふむ、了解した。…そう言えば屋敷の前まで来たというのに、何故我々はわざわざ立ち話をしているのであろうな」

「そうですね。わざわざ結界を開けたというのに、いったい屋敷の前で何をしているのですか？…あら、お客さんが来ていたのですね」

と、イザナギと結局立ち話をしていると、突然俺でもイザナギのものでない声が混ざった。その声のした方を見てみると、建物の扉が開いておりその前には一人の女性が呆れた顔で立っていた。俺と目が合うとニコリと笑ってひとつ会釈をする様は、とても美しい。イザナギにも共通しているが、二人とも綺麗な黒髪と整った顔立ちをしている。

「うむ、帰ったぞ、イザナミ」

「お帰りなさい。それから、いらっしやい」

「あ、お邪魔します」

はっ。つい丁寧な言葉遣いをしてしまった。彼女の丁寧な雰囲気には自分の気も引き締まるようなものを感じる。

そしてイザナギの次はイザナミさんが来ました。もうアマテラスと来ていいんじゃないかな。

イザナミさんにはイザナギと同等ほどの力を感じるが、イザナギと違いとても物静かな雰囲気、そして神秘的な空気にあふれていた。イザナギはもう少し豪儀な感じだ、そして神秘的というか神々しい。決して騒がしいわけではないが、威風堂々としているといえбайいだろうか。

イザナギの家に上がり部屋まで案内されたが、中の造りはとても単純だった。小部屋といえるような壁で区切られた部屋は2、3ほどしかないようで、大部屋一つが家の大体のスペースを占有している。



床は板張りで、しかしどのような技術で接合してあるのか軋みなどは一切なかった。つやつやとした表面はさしもの一枚の板のようで、未来の科学技術をもつてしてもこれほどのものはなかなか作れはしないだろう。

さて、俺は今大部屋の真ん中でイザナギと膝を突き合わせて座っているのだが、現在進行形で小さい敗北感と大きい感動に打ちのめされていた。そんな俺の手にあるのは一つの器。イザナギの手にも同じ物があり、なみなみと透明の液体がそそがれている。

「どうだ。なかなかのものであろう?」

イザナギの言葉に、俺は小さく頷いた。これほどのものは、前世も含めて味わった事はない。キリツとした辛口とほんのりとした甘味が絶妙に混在し、口当たりも良く、すつと口から喉へと伝ってゆく。飲んでしまった後も身体の隅々まで何かが巡っているような気がして、とてもいい気分になるのだった。

「おかわりいかがですか?」

「あ、お願いします…」

そばに座っていたイザナミさんが空になった器を見てお代わりを差し出した。俺はなんとなく借りてきた猫のようになりながら注いでもらい、こうなった発端を思い出していた。

家に上げられた後は大部屋に案内され、用意された座布団に腰を下ろしたのだが、その時に肩にぶら下げていた瓢箪を下ろしたのが始まりだ。

どうやらイザナギも気になっていたらしいが、聞くタイミングが今

まで無かつたらしい。それは何か、との問いに俺が簡便に『酒』と答えるとそのまま酒の話題になったのだ。イザナギも酒を嗜むと聞き、まずは一杯ご馳走になったわけだが、結果は上の通り。

俺の作った酒ではこれほどの味を出すには、まだ千年単位の時間が必要では無いだろうか。俺の酒は今壁にぶち当たっている。その壁をまず越えなければならぬのだ、時間がかかるのは当然の事。しかもそれを乗り越えたところで課題はまだいくつも残っていることだろう。それほどの代物なのだ、イザナギの酒は。まさに神酒みきと言ったところか。

「ウカノはこの世界に生まれてどれほどになるのだ？」

「女に歳聞くなよな。別にいいけどさ。…そうだな、多分八十万ほど太陽と月を見たような気がするが。そう言うイザナギはどうなんだ」

「我か。我は、いやイザナミも我と同時期に生まれた事を考えれば我らとなるが、この世界ができた頃に生まれたことは覚えているのだが。どれほどかは覚えておらん」

「昔ってレベルじゃないな。生まれた時はどんな景色だったんだ？」

「ふーむ…虚無だったような気もすれば、何かが出来上がっていたような気もする。なんとも言えん曖昧な世界だったように思うがな」

生まれた時一番最初に何を見ましたかとかナンセンスすぎたか。俺は今世の最初が今ティニユーだったから覚えているが、イザナギはそういうわけでもないのだ。ましてや気の遠くなるような年月が過ぎていくのに詳しく覚えていくはずもない。イザナギの話からすれば、一応イザナギの前があったということだろうか。…俺が見たわ

けじゃないしな。イザナギもあまり覚えていないというのに考えたところで不毛か。

「イザナギは地上を調整する、とか言ってたよな。どういうところを変えるんだ？」

「ふうむ。まずは一番の大仕事となるであろうが、『禍気』に手をつけることになるだろう。このままのカタチで地上に残るには劇物すぎるのでな、密度を薄めるつもりだ。量が少なければ問題は無いのだが、今の地上にはこれに満ち溢れている」

「そうすると、『禍物』はどうなるんだ？」

「どうもならんだろう。これ以上の変化は止まる、が、それでどうなるというわけではない。…いや、成り立ちが少し変わる事になるかもしれない。我らの天界の天人同様、地上には『禍気』の影響で劇的な速度でヒトが生まれつつある。そうすれば感情も生まれる、正だけなればよいのだが、そういうわけにもいかんだろうな」

「よく分からなくなってきたぞ。簡単に頼む」

「むう。喜怒哀楽だけならばむしろよいのだが、憎悪や恐怖といった顕著な負の気は周囲に少なからず影響を与える。それらが深刻な変化をもたらす前に、何らかのおとしどころを作っておかねばいかんだ。…おそらく『禍気』を薄くするためにそれらを使い、それらのおとしどころには『禍気』を使うことになるだろう」

「…ふうん。ま、すぐの話じゃないんだろ」

「うむ。この案が形になるのはずいぶんと先になるであろうな」

「さて、俺はそろそろ帰るぞ。あ、イザナミさんもありがとございまして」

まるでうわばみのごとくかばかばと器を空け、アルコールを微妙に分解しながらほろ酔い状態に調整し俺はようやく席を立った。

イザナミさんは、手を伸ばしながら微笑み

「おお!?!」

さりげなく俺の頭に伸びてきた手を、俺は寸前で反射的にかわした。かわされたイザナミさんは伸ばした手をふらりと彷徨わせている。その顔はどこかしょぼんとしていた。その視線は俺の頭の上、具体的にはふさふさの耳に向いている気がする。

「む、すまぬな。イザナミは可愛いものが好きなのだ。前も三つ頭の犬を拾ってきて…」

イザナギはスルーするとして、なんだかイザナミさんの顔を見てみると俺が悪いような気がしてきたので、俺はおとなしく頭を差し出した。

するとイザナミさんはにっこりと笑うと改めて手を伸ばし、俺の頭を撫でるのだった。母狐になめられた記憶はあるが、撫でられた記憶は無い。それ以降はそんな繊細な動作をするものには出会った事は無い。狐になって初めての経験に、耳がぶるぶると震えている気がする。まあイザナミさんが嬉しそうなので本望です。

「しかしウカノよ」

ようやく解放された俺に、イザナギがふと声をかけた。さっきまでケルベロスもどきの話を熱く語っていた時とは違い、その顔には真剣味に溢れている。俺はそれにつられて自然と身体を引き締めた。

「我は、又シのその口調はどうかと思うのだが」

「気を引き締めた俺の緊張を返せ。んなことどうでもいいだろ……。それに、理由はあるぞ?」

「ほう、なんだそれは」

「実はな」

「うむ」

「俺の前世が男だったんだ」

「…うむ。それでその理由とは?」

おい神様、スルーすんな。

あ、はじめまして、奥さん（後書き）

東方でも結界とか魔法とかありましたし、いいですよ。きっと。

あ、いくつか時代間の価値観や法則などを画一化してます。美醜を昔と今でいちいち表現するのはめんどいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3229y/>

---

東方空狐道

2011年11月10日08時05分発行